

熱帯 バイオマス社会

オイルパーム特集 (I)

内陸先住民による小農的オイルパーム生産 加藤 裕美、祖田 亮次……………	1
アブラヤシの故地を巡る – 西アフリカ、ギニア紀行 石川 登……………	6
関連活動記録	
ボルネオ民族誌研究会報告……………	9
編集後記……………	10
プロジェクト参加メンバー……………	11

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (S)

東南アジア熱帯域における プランテーション型バイオマス社会の 総合的研究

Keresia 社のアブラヤシ搾油工場
自分のプランテーションだけでなく、周辺の村からも次々とアブラヤシの実が運ばれてくる。
2011年 8月 (写真: 鮫島 弘光)



オイルパーム特集(I)

内陸先住民による小農的オイルパーム生産

加藤 裕美 (総合地球環境学研究所)
祖田 亮次 (大阪市立大学文学研究科)

マレーシア・サラワク州における近年のオイルパーム生産の伸び率は目を見張るものがある。1990年代には十数ヘクタールだった栽培面積が、2004年には50万ヘクタールを超え、2010年には92万ヘクタールに至っている(図1)。

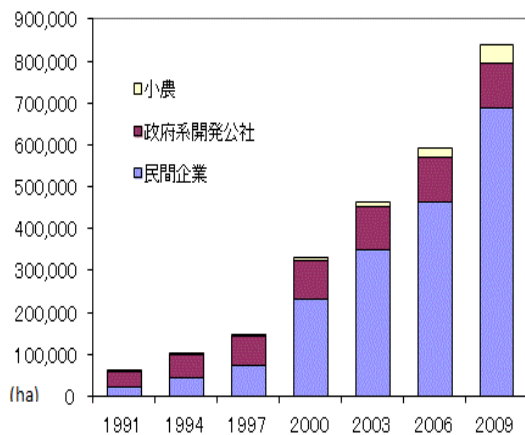


図1 サラワクにおけるオイルパーム植栽面積拡大の推移(1991~2009)(ヘクタール)
出典: Yearbook of Statistics Sarawak 各年版、Malaysian Palm Oil Statistics 2007, 2010

オイルパーム・プランテーションは、一般に、既存の森林(その多くは二次林やゴム林)を数千~数万ヘクタールにわたって皆伐したうえで新たに植栽することから、劇的な景観変化による生態系の破壊や土壌の流出、あるいは、大量の農薬や肥料の投与がもたらす河川の水質汚濁など、さまざまな問題が指摘されてきた。また、先住民との土地闘争も多くの議論を喚起してきた。

一部では、かつての木材伐採を凌ぐほどの環境破壊や社会的コンフリクトの元凶として捉えられてきたオイルパームであるが、近年では、サラワク州内にもRSPO(Roundtable for Sustainable Palm Oil)認証を取得する企業が現れ、場所によっては、内陸先住民も自分たちの先住慣習地(NCR)に積極的にオイルパームを植え始めている。図1の栽培面積の推移を見ても、2000年代中ごろまでは民間企業によるプランテーションの拡大を中心にした伸びであったのに対し、近年は小農によるオイルパー

ム生産も増加しつつあることが分かる。しかし、これまで、サラワクにおけるオイルパーム小農栽培についての報告はごくわずかなものに限られており、その実態は十分に把握できていない。本稿は、2011年8月にTubau周辺のロングハウス住民を対象に行った、オイルパーム小農経営に関するパイロット調査の報告第一弾である。

私たちは、長いあいだサラワクに通い続けているが、ほんの5~6年前までは、オイルパームは先住民にとってネガティブな影響しか与えないのではないかと感じていた。2000年代初頭においても、一部の村でオイルパームの栽培を始めた人々もいたが、先住民が見よう見まねで作るオイルパームの実を、企業の搾油工場が購入してくれるのかどうかも、その時点では誰も確証を持てずにいた。ところが、ここ数年で内陸の先住民社会にもオイルパームが浸透し、道路が通じているところでは、ほとんどブームともいうべきほどに現地住民がこぞってオイルパームを植え始めている。

たとえば、プランテーション会社であるKeresa社の搾油工場を訪問したときも、周辺ロングハウスからやってきたと思われるローリーやピックアップ・トラックがひっきりなしにオイルパームの実を運び込んでおり、なかには乗用車の後部座席にオイルパームを満載にして売りに来ている者もいた(写真1)。しかし、彼/彼女らはいったいどのようにしてオイルパームを育て収穫しているのか、集荷や輸送のシステムはどうなっているのか、そもそも生産者たちは採



写真1 後部座席にオイルパームを積んだ車
搾油工場の入り口で重量を量って窓口に書類を提出する。

算が取れているのかなど、基本的なことが分かっていないため、疑問は尽きない。

今回の調査では、こうした基本的な部分に関する情報を、いくつかのロングハウスから収集した。訪問したロングハウスは、Keresa 社のプランテーション・サイトに隣接して存在する Rumah Majang と Rumah Anchai、Bintulu から Tubau へ向かう舗装道路 (Bakun Road) 沿いに位置する Rumah Nuga (以上、いずれもイバン)、そして同じく Bakun Road 沿いにあり、Tubau の町に程近い Rumah Wan (カヤン) である。また、甲山氏らが水位計などを設置している、Tubau よりやや下流の個人宅 (イバン) でもオイルパームの栽培を行っているので、彼からも小農生産に関する貴重な情報を得ることができた (図 2)。

訪問したいくつかのロングハウスでは、オイルパームを初めて植えた時期や植栽面積、輸送システム、販売先などの面で、いくつかの顕著な違いがあった。各ロングハウスにおけるオイルパーム生産の傾向はおおよそ以下の通りであった。

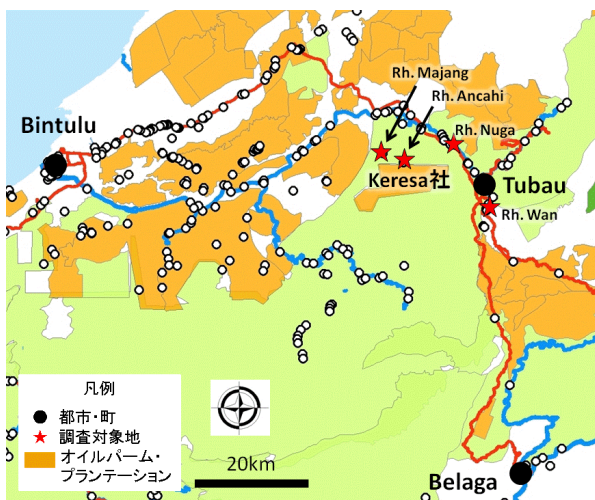


図 2 調査地概要

Rumah Majang (26 戸)

このロングハウスでは、8 年ほど前からオイルパームを植え始めたという。当時は Datuk Linggi (Keresa 社社長) が無料で苗木を分け与えてくれた。植えた本数は世帯によって異なっていたが、各世帯 500 ~ 1,000 本くらいだった。村長自身は最初に 700 本植えて、その後も追加植栽していき、現在では 2,000 本ほどになっている。3 年ほど前から、MPOB (Malaysian Palm Oil Board) で購入した種を自分で育てて移植するようにしている人が多い (写真 2)。

この村で収穫したオイルパームは、すべて Keresa の工

場に売却している。村長のように 2,000 本ほどのオイルパームを植えている世帯は 1 月に 2 回ほど収穫を行い、それぞれ 6 トン前後、1 月に 12 トン前後の収量を得る。ローリーで運べる量は 3 トン前後なので、1 回の収穫につき、搾油工場まで (1 時間弱) 2 往復することになる。収穫の際に労働者を雇用することもあるが、現在のところはすべて村内で調達している。また、複数の世帯がゴトンロン (共同作業) で同時に収穫作業を行い、相互に助け合うこともあるという。

この村には 6 台のローリー保有者がいて、それぞれ自分の収穫物を 1 月に 2 ~ 3 回程度運ぶ以外は、ローリーを持たない村人の収穫物の運搬に利用している。輸送費は 1 トンにつき 30RM が相場のようなのである。また、これとは別に運転手の労賃が 20RM かかる。現在ではほぼ全世帯が収穫を得ており、そのすべてを Keresa の工場に運んで



写真 2 ロングハウスの裏で育てているオイルパームの苗 (Rumah Majang) いくつかのプラスチック・バックは発芽していない。苗の育て方としてやや雑であるという印象を受けた。



写真 2 小農に与えられた RSPO 認証 (Rumah Majang) ロングハウスの廊下に掲げられていた。

いるが（ほとんどの世帯がオイルパーム売却用ライセンスを保有）、近隣に SOP (Sarawak Oil Palms) 社が搾油工場の建設を進めつつあるようで、その工場ができれば売却先を考え直すかもしれないということであった。

Rumah Majang が他のロングハウスと異なるのは、Keresia 社からの協力態勢の強さである。このロングハウスでは、Keresia 社のグループ・スキームの一環として全 10 回の研修を受けている。また、これまでも RSPO 認証の研修を受けており、2010 年に小農として認証を受けている。研修にはロングハウスの全世帯が参加し、村全体でオイルパーム栽培に向けて活気づいている印象を受けた。研修の修了証をみせる村人の顔も誇らしげである。

Rumah Anchai (19 戸)

このロングハウスも Keresia 社のプランテーション・サイトに隣接するイバンの村だが、Rumah Majang よりも栽培開始は遅く、3～4 年前に始めたばかりだという。彼／女らの多くは、ミリ - ビントウル道路沿いの Batu 14 にあるカヤンの種苗業者からオイルパームの苗を購入して植えているという。少なくとも村長は、種から育てたことはないとのことであった。

この村では、昨年からようやく一部の世帯で収穫が始まったばかりである。村長の Anchai 氏は、2,000 本ほどのオイルパームを植えており、先述の Majang 氏と同様、1 ヶ月の収穫は 12 トン程度になるという。他の世帯は、200～300 本のところもあれば、600～700 本のところもあり、ばらつきは大きい。現在では全世帯がオイルパームを植えている。多くの人が言っていたのは、1 ヶ月に 1～2 トンの収穫があれば十分に生活していけるということであった。

この村にはローリーは 1 台しかないが、まだどの世帯も収穫量がそれほど多くないので 1 台のみで輸送需要はまかなうことができる。Keresia の搾油工場に果実を売するためのライセンスは、輸送用ローリーを保有している村長しか持っていないが、他の世帯の人たちは、その村長のライセンスとローリーを利用して Keresia の工場に果実を売却している。輸送費は Rumah Majang と同じく 1 トンにつき 30RM かかるとのことであった。

村の領域まで Keresia が入ってきてオイルパームを植えるということもあったが、特に問題となっていない。先住慣習地 1 ヘクタールにつき 700RM (約 2 万円) の賠償金が支払われ、それでおおよそ解決してきたようである。こうした点は、先述の Rumah Majang でも同様であるが、

Rumah Majang の領域では、Sarawak Planted Forest 社のアカシア植林によっても先住慣習地の一部が侵犯されており、そちらに関しては、住民曰く「勝手に測量して勝手に木を植えている」とのことで、住民感情を大きく害しているようであった。

Rumah Anchai は、Rumah Majang とおなじく Keresia プランテーションに隣接する村であるにもかかわらず、Keresia 社からの支援はあまり受けていない。栽培開始も遅く、収穫のある世帯もまだ少ない。苗も Keresia 社以外から購入していた。そして、Keresia 社の研修にも一度も呼ばれたことはないという。Rumah Majang と Rumah Anchai では Keresia 社との関係に差があるという印象を受けた。Keresia 社がいう周辺の村への補助というものは、今のところ Rumah Majang に限られるものかもしれない。



写真 4 Rumah Anchai で聞き取り調査をする加藤

Rumah Nuga (23 世帯)

Rumah Nuga は、Bakun Road 沿いに立地しており、Tubau 周辺のイバンの中でも比較的早い段階でオイルパームを植えていた。村長の記憶は明瞭ではないが、2003～2004 年ごろ、つまり Rumah Majang と同じくらいの時期に植え始めたようである。各世帯の植栽時期はさまざま、まだ結実に至っていない世帯もあるが、ほとんどの世帯が 300～1,000 本のオイルパームを植えているという。村長の畑は 700 本で、結実しているのは 500 本とのことであった。

苗の購入先は、民間の種苗業者や農業局など、各世帯によって異なるようで、また、収穫した実を売る場所も、人によってさまざまであるが、Keresia 社の工場ができてからは、距離的な近さと値段を考慮して、そちらに売ること

が多くなったようである。村長は1ヶ月に2回、1回につき3トン～6トンを収穫し、売っている。

この村にある果実運搬用のローリーは、村長が保有する1台のみである。実は、石川・星川・祖田は2008年8月にもこの村を訪問しており、ちょうどその日に村長のローリーが納品されたという経緯がある。その当時の村長は、これから村人たちもオイルパームを作るようになるから、それをローリーで運搬して小遣い稼ぎをするんだ、と話していた。しかしながら、当ては外れたようである。というのも、各世帯がそれぞれ個別に運ぶようになったからである。

村長以外の村人たちは、現在はまだ収穫量が少ないので Hilux やその他の小型乗用車でも十分運べるという。2008年に訪問した時は村に数台しかなかった乗用車も、いまでは9台に増えており、ここ数年のオイルパーム景気を感じさせる。また、車を持たない世帯も、収穫できそうな時期になると Bintulu の町で仕事をしている息子を呼んで、息子の車で実を運ばせたりしているという。かなり個人主義的な小農経営を行っているロングハウスといえるだろう。



写真5 Rumah Nuga で聞き取り調査をする祖田

Rumah Wan (75 戸)

この村の人たちは4～5年ほど前にオイルパームを植え始めた。村人によると、このあたりのカヤンはすでにほぼすべての世帯がオイルパームを植えているというが、Rumah Wan ではまだ収穫にまで至っていない世帯が多く、ブンフルをはじめとする5～6世帯が昨年あたりから実を売り始めたという状況である。多くの人は、種から育てることはせずに、華人から苗を買ってきて植えたという。

車を持たない世帯が実を運搬するときは、他人から

車を借りたりすることもある。現在、村に4台ある Hilux (約700kg 積載可能) を借りて、Keresa の工場まで1往復するとおおよそ80RM かかる。工場の近くにある Rumah Majang や Rumah Anchai からの輸送費(ローリーに積載して1トンあたり30RM)に比べると、かなり割高になるが、工場までの距離が長い(往復約15km)ためであろう。このほか、この村から婚出した先の華人商人に頼んでローリーを出してもらうこともあるという。

ここでもオイルパーム熱は高まっているようで、普段は伐採会社で働いているが、たまたま村に帰ってきていた青年は、「あと5年もすれば、周辺はどこもオイルパームになるだろう。私もオイルパームを十分な数だけ植えたら、伐採キャンプでの仕事を辞めて戻ってくるつもりである」と語っていた。

Rumah Wan で印象的だったのは、ブンフルの弟が大規模なオイルパーム園を作ろうとしていたことであつた(写真4)。彼の計画では、おおよそ100ヘクタールの先住慣習地にオイルパームを植える予定だという。実際にその現場を見せてもらったが、現在はようやく5ヘクタールほど開き、苗木を植え始めた段階であつた。資金は、AgroBank から数百万RM を借りるつもりでいて、現時点で既に約60,000RM を借りている。最近では肥料代が高くて困っているという。

開発予定の100ヘクタールの土地は、ブンフルの父の土地のほか、一部は村人の土地も使うというが、ゴムが植えられているところは避けて、基本的には二次林を開く予定である。伐採と整地はインドネシア人労働者を雇用しているほか、道路やテラスの整備は業者に委託して重機を



写真6 Rumah Wan 近くのオイルパーム園
背後の二次林も近い将来に伐採されオイルパーム園に転換される予定である。

使用している。たとえば、テラス作りのためにショベルカーを使った場合、作業量によって支払いは異なるが、平均すれば1日当たりおよそ1,000RM(約3万円)かかるという。

このような、小農の規模を越えるほどの投資と開発は、階級・階層的な社会構造を持つカヤンの富裕層であるからこそ可能なかもしれない。その意味では、近隣のイバンの小農的オイルパーム生産とは、今後、大きく異なる様相を呈する可能性もある。

以上、4つのロングハウスでの聞き取りから得られた情報を簡単に記載した。今回は限られた時間内に、ごく簡単なインタビューと視察を行っただけであるが、オイルパーム小農のバリエーションをおおよそ知ることができた。

オイルパームを植えている人の多くは、本人や家族がプランテーション会社での就労経験を持っていたり、会社に知り合いがいたりして、見よう見まねで植えて、人づてに栽培技術を学んでいるが、会社が推奨する施肥の方法や植栽スペースの取り方などについては、それぞれが独自の方法を試みていることも分かった。

現時点で言えることは、多くの人々がオイルパームで経済的に潤いつつあり、将来的にもかなり大きな期待を抱いているということである。調査当時のオイルパームの買い取り価格は630RM/ton(グレードA)だったので、Rumah Majang や Rumah Anchai の村長のように、2,000本のオイルパームを植えており、1ヶ月に12トンの生産量がある場合、単純に計算すれば1ヶ月7,500RM(約20万円)の粗収入となる。これは、私たちが予想していた以上の金額であり、種・苗の購入費、肥料代、農薬代、ガソリン代、労働者雇用費など諸経費を差し引いたとしても、先住慣習地と世帯内労働力を十分に持っている場合には、かなり魅力的な生業になることが理解できる。

一方、Lahap氏やNuga氏からの聞き取りによると、収穫した果実をどの工場にどういったタイミングで売るとかも、非常に重要になるようである。現金で購入してくれるところや、後から銀行に振り込まれるところがあり、それぞれで買い取り価格が異なっている。また、小農から積極的に直接購入している工場もあれば、工場を持たずに小農から大規模工場へ流すための仲買を行う業者などもいて、生産現場から搾油工場までの流通経路だけでもかなり複雑であることが分かった。

本稿では詳述できなかったが、コメやゴム、コショウなど、従来からあった自給・商品作物に対する態度の変化も、

各ロングハウス・個人によってさまざまで、生業のポートフォリオのなかにオイルパームがどのように位置づけられているのかという点についても、より詳細な調査が必要になるであろう。

アブラヤシの故地を巡る — 西アフリカ、ギニア紀行

石川 登（京都大学東南アジア研究所）

私たちの調査地であるサラワク州でも日常的なランドスケープとなりつつあるアブラヤシ¹の原産地はアフリカである。故地を離れて東南アジア島嶼部で拡大した商品作物という意味で、ゴムと同様にたいへん興味深い植物だ。現在、アブラヤシは、プランテーションというかたちをとって東南アジア島嶼部の社会や生態系に大きな影響を与えている。アブラヤシの故地をアフリカ大陸に探る — このような目的をもった西アフリカ調査の道すがら考えたことを以下に記してみたい。去る2011年8月12日から21日まで、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科の山越言さん（霊長類学・アフリカ地域研究）、同地域研究統合情報センターの柳沢雅之さん（農業生態学・ベトナム地域研究）、平井将公さん（生態史・アフリカ地域研究）とともにギニアとセネガルを旅する機会を得た。旅の詳細やフィールド情報を記す紙幅はないが、以下では、三人の同僚との分野を越えた論壇風発を通して得た、自分のなかでの小さな発見をいくつか紹介したい。

ギニアで車窓から眺めていて面白いのは、アブラヤシが国家的なランドスケープとなっていることだ。人々は永年にわたって焼畑をしながらアブラヤシを伐らずに残して



写真1 安定的なアブラヤシのランドスケープ

¹アブラヤシまたはギニアアブラヤシ (*Elaeis guineensis*) はアフリカ原産で、東南アジアには19世紀に導入され、マレーシアでは1960年代から大規模プランテーションでの栽培が増大した。現在の栽培種は品種改良されたもので、一部はアメリカアブラヤシ (*Elaeis oleifera*) との交配種である。

きた。アブラヤシは耐火性に優れ、キャッサバやコメ、そして落花生などの焼畑耕作でフィールドに火をかけても生き残る。そのために疎らではあるが、時にはプランテーションと見まごうアブラヤシ林が畑のなかに出現することになる。見渡すかぎり平地から尾根の上までアブラヤシが点在する風景は、ボルネオのプランテーションに慣れたものには不可思議に感じられる。山越さんによれば、昔の風景写真などを収集してみると、すでに植民地期から、このようなランドスケープのなかでのアブラヤシの存在は変わるものではなかったという。人為がずっと働き続けて維持された里山的な風景である。このような景観は、熱帯地方に南下するにつれ変化し、ジャングルのなかのアブラヤシに変化していく。私たちは、京都大学霊長類研究所が三十年以上にわたってフィールド・ステーションを維持し、チンパンジーの観察をおこなっているボツソウの森を訪れた。



写真2 ボツソウの森のチンパンジー

このジャングルは日本でいうところの「鎮守の森」として文化的な禁忌の対象とされており、その周囲は多くのアブラヤシが自生する焼畑休閑林が広がっている。その一部はチンパンジーによって実が食され、糞に含まれて散布され、発芽して増えたものだ。チンパンジーにも食べ物の好みがあり、あくまでも果実の代用食というのがアブラヤシの位置づけというのも面白い。

西アフリカのひとびとの生活のなかで、アブラヤシはきわめて大きな意味をもつ。まずは、美味しいのである。サラワクのプランテーションのアブラヤシは、その実をかじってみても渋さが先に立ち、投入された農薬が頭に浮かんでし



写真3 アブラヤシ油をかけると美味



写真4 市場で売られているローカルのアブラヤシ油



写真5 ギニア版「産米林」(アブラヤシと焼畑)

まう代物である。これに対して、故地のオーガニックなアブラヤシの実はいくらでも甘く、抽出された赤みを帯びた食用油はエクストラ・バージンのオリーブオイルのように料理にかけてすこぶる美味である。あまたの換金作物のなかでも、食べてよし、搾油すれば商品として安定的な収入を生み出すとなれば、この植物が増えない理由はない。

ギニアにおいてはナショナル・ランドスケープ、ナショナル・インカム、そしてナショナル・ダイエットの一部とも

いえるアブラヤシには所有者がない。いわゆる「無主物」としてひとつひとつに理解されている。Tu peux le prendre, si tu peux (You can take it, if you can)というのが人々の基本的な構えである。ボルネオの多くの樹木のように占有する親族集団が特定されていることもない。しかしながら、アブラヤシ油をめぐる生産過程や社会関係をしっかりとみないと、この「無主」という状態は理解できない。山越さんの言葉を借りれば、if you canという部分に、この無主性を考える鍵がある。アブラヤシの高い幹を特別の道具を使ってのぼり、山刀をつかって収穫をするのは労働集約的、かつ危険な作業である。アリなどに加えて厄介なのは蛇の存在だという。さらに、収穫した実を搾油するために、熱湯で長時間煮て油分を分離させなければいけない。これは個人や世帯を越えた集団的な作業であり、複雑な行程にはジェンダーの役割分担がある。こと「生産」ということになると、アブラヤシは固有のプロセスや社会関係の網の目のなかに組み込まれているということができるだろう。si tu peux -- 収穫した上にこれを油にすることができるならばお取りなさい -- 現地のひとつひとつの言葉に留意しながら、生態や植物の個性、そして人々の社会関係をしっかりと調査をしていくと、この「無主」という言葉からいろいろなことがわかることになる。

私たちがボルネオで接している森林産物は、その多くが世界的な市場ネットワークのなかで商品として流通してきた。アブラヤシ、木材、ゴム、ココ椰子、エンカバン、籐、



写真6 アブラヤシの幹をのぼる道具



写真7 森のなかでのアブラヤシの搾油行程

ジュルトン、ダマール、グッタペルカ、燕の巣など森林産物が欧米、中東、極東へと運ばれてきた。バナナやカヤン、そしてイバンの人々が採集した森林資源は、大陸を結ぶ海底ケーブル材として、欧州戦時下の手榴弾用バスケットや馬具のなめし剤として、さらには儀礼の際に焚きしめる香や香港の高級レストランの食材として海をわたった。これらのボルネオの森林資源の取引ネットワークに比して、より「リージョナル」であるのが西アフリカの森林産物であるといえるのではないか。象牙やコパールなどを除けば、世界大のネットワークにのって大いに交易された森林産物は東南アジアに比べれば少ないようだ。コラの実もココ・コーラの原料とされたことはつとに知られているが、その主な取引圏はアフリカの域内である。なぜ熱帯アフリカの森林産物は、世界商品にならなかったのか。ひるがえって、なぜ東南アジア島嶼部のそれはシンガポールやロンドン市場と直結し、世界大の商品となったのか。このような複眼的な問いを立て解をえるためには、アフリカとアジアを歩きまわるしかないようだ。

現在、西アフリカでもプランテーション型のアブラヤシ植栽が進んでいる。いままで触れてきた伝統的なアブラヤシに対して、拡大中のものはマレーシアやインドネシアで目にする短軀多葉なハイブリッド種である。ギニアで訪れたプランテーションは、まさに私たちがマレーシアで馴染んでいるものである。これらの椰子から生産される油は、ローカル種からできる食用油とは異なる生産システムと流通経路を形成している。ギニアでのアブラヤシ・プランテーシ

ン開発は、その緒についたばかりであり、東南アジアのそれと比して規模も小さい。この産業の未来は、マレーシアやインドネシアが経験したように労働の組織化をどう行うかにかかっている。マレーシアのように国外の低賃金労働者を動員できるのか。はたまたインドネシアのように小農を組みこんだ生産システムが生まれる可能性があるのか。注目していきたいところである。



写真8 アブラヤシ種子の小売り

今回の西アフリカ調査では、何を見、何を聞くにつけ、つねに頭のどこかにはサラワクのアブラヤシ・プランテーションが鏡像としてあった。地域間比較の視点からものを見て、考える楽しさを満喫できた旅でもあったといえるだろう。いま考えているのは、ゴムの故地をアマゾンの流域社会に求めることだ。アフリカ西海岸とアマゾンには実は遠くない。奴隷交易の時代を偲びながら、西アフリカ沿岸から海をこえてブラジルを訪れる旅を思案中である。

関連活動記録

ボルネオ民族誌研究会報告

2011年12月16日
桜美林大学

2011年12月16日（金）に桜美林大学・リベラルアーツ学群・文化人類学専攻主催、当科研共催でボルネオ民族誌研究会が行われました。この研究会では、同専攻教授の奥野克巳氏と同大学基盤教育院・非常勤講師の長谷川悟郎氏によって、それぞれブナン、イバンについての研究成果の発表が行われました。

【発表1】

「森のなかの不在と実在の民族誌－ボルネオ島狩猟民ブナンにおける人と自然－」

奥野 克巳

この発表では、ブナンにおける人間と動物の関係を *uban* 「痕跡」、*tawai* 「慈しみの表現」、*ngeluin* 「控えめの表現」といった3つのキーワードから読み解くことを試みていました。

uban 「痕跡」は、森の中で動物が残す足痕や血の痕だけではなく、死者が生前いた自然景観をも含み、それはブナンにとって特別に情緒を昂らせるものであり、そうした情緒的な感情が、森と人との絆を維持しているとのことでした。

また、ブナンは森の動物や自然、人間に対して *tawai* 「愛おしい」という表現を使い、そうした感情表現は「狩る」「狩られる」の関係にある動物に対しても用いられることから、動物に対して情緒的な絆を築いているようです。

さらに、ブナンは *ngeluin* という緩叙法をもちいることによって死者の名前や殺された動物の名前を別の名で呼び、人間と動物をきっちりと切り分けられる別々の存在とは考えていないとまとめていました。

最後は、ブナンにとっての自然とは池澤夏樹 1996（『母なる自然のおっぱい』）で述べられている自然に近いものだと結んでいました。つまり、森とは、人間、植物、動物などの諸存在が一体となって生み出す情緒性を帯びた空間であるとのことでした。

【発表2】

「称号化される模様意匠－ボルネオ島 イバンの染織模様の命名体系を考察－」

長谷川 悟郎

この発表は、イバンが伝統的に制作する染織布に織り込まれた模様の霊力と織り手の位階序列の関連を再考を目的としたものでした。

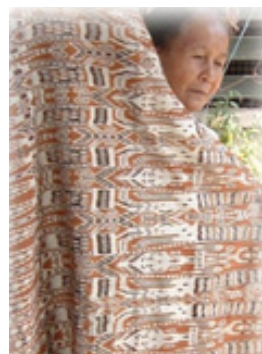
先行研究では、イバンの染織布の模様は、霊的威力を持つとされ、織り手の経験や社会威信、位階序列によって扱える模様が決まっていたと言われてきました。例えば *Linggi* などは模様の象徴論的解釈を行い、*Gavin* は模様の命名体系を明らかにしてきました。そして、霊的威力の高い模様は、社会威信や位階序列の高い織り手が織るものとされてきたそうです。

しかし、2003年に行われたプア・クンプ品評会の出品リストを分析すると出品者の年齢とタイトルに含まれる模様の霊力が相応しないものが多くみられたとのことでした。例えば、熟練者と思われる年齢の織り手が霊力の弱い模様を出品していたり、若者が霊力の強い模様を出品している例がみられたようです。

結論としては、織物に織られる模様は霊力の強さのみによって評価されるものではないとまとめていました。

両氏の発表とも、ボルネオの現地社会でみられる具体的な事象を詳細に分析しており、学生からも活発に質問がなされました。今後のボルネオにおける民族誌研究の可能性の一端を示す、大変興味深い研究会となりました。

（報告：加藤 裕美）



織り手とプア・クンプ（撮影：長谷川 悟郎）

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原 薫	グローバル・ヒストリー	京都大学 東南アジア研究所
	水野 広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島 弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉 都	生態人類学	京都大学大学院 農学研究科
	生方 史数	天然資源経済学	岡山大学 環境学研究科
	市川 哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	産業技術総合研究所
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学 次世代研究者育成センター
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究科
	小林 篤史	歴史学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	総合地球環境学研究所
	Jason Hon	動物生態学	京都大学 地球環境学堂
	加藤 裕美	文化人類学	総合地球環境学研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	AbdulRashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lee Hua Seng	森林社会学	Sarawak Timber Association
	太田 淳	歴史学	Academia Sinica (Taiwan)
	大竹 真二	映像人類学	モイ
	木谷 公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中 園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

今号はオイルパーム特集といたしました。

引き続き原稿の投稿を募集しています。

(鮫島弘光)

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX: 075-753-7338
<http://biomassociety.org>
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀 (基盤S事務局)

Keresia 社のオイルパームプランテーション

